

ご注文は楽しい日々ですか？

登美司 つかさ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

喫茶ラビットハウスでバイトに勤しむ主人公、今保田(こんぼた)杏樹(あんじゅ)

そんな彼女と、喫茶店の仲間たちの描く、けっこうゆりゆりとしたお話。

要するにオリ主の女の子が、ごちうさのヒロインたちとイチャイチャする話です。

目次

一品目	くプロローグのココア仕立てく	1
二品目	くオリ主登場のポターージュ添えく	6
三品目	くココアの初仕事 三人称仕立てく	10
四品目	くそれぞれの夜 ホワイトシチューを添えてく	16
五品目	く迷宮に注ぐココアく	20

一品目 くプロローグのココア仕立てく

Side ココア

私、保登心愛はもうすぐ高校生になる15歳。今は進学先の高校がある街で、下宿先を探しつつ散策しています。

木組みの家と石畳の町並みがお洒落で、歩いていてもとっても楽しいのですが……、迷子かもしれないです……。香風さんというお宅に下宿するのですが……どこにあるんだろう？ そんな中、私の目に留まった一軒の喫茶店。その看板にはコーヒーカップとウサギがモチーフになっていて、店名は

『rabbit house』

だそうです。ウサギ。きつと中にはウサギがいる!! せっかくだから、ちよつと休んでいこうかな。重厚感ある趣のドアを開けると、カランカランというベルの音がお迎えしてくれる。

「うつさぎくうつさぎく♪」

ウサギをモフモフしながらコーヒーが飲む。想像しただけでも笑顔になっちゃうよ。楽しみだなく。ウサギの歌を口ずさみながら、店内へ。

「いらつしやいませ」

そう言つて出迎えてくれたのは中学生くらいの小柄な女の子。お店の制服であろう青の格好が、髪の色ともマッチしていて、すごく可愛い。それと、その女の子の頭に乗っている白い毛玉。なんだろう、アレ？ というか、ウサギ。ウサギがない!!

「あの、どうかされましたか……?」

もしかしたら隠れているのかもと思つて辺りを見回していると、女の子が戸惑いながら質問してきた。だから素直に聞いてみた。

「ウサギがない!?!」

「……………(なんだ……この客)」

女の子は凄く怪訝な目をこっちに向けています。これがいわゆるジト目というものでしょう。それはさておき、やっぱりあの白いもじやもじやが気になるのです。

「……もじやもじや」

「……は？」

「あ、いや、その……」

あー！ 声に出てた!?

「これですか？ これはティップーです。一応うさぎです」

えっ!?! その白いもじやもじやが、ウサギさんなの!?! だって耳は短いし、それにまん丸な体だし。あくでも、モフモフしたら気持ち良さそう。そう、モフモフできるんだったら、どんな動物も大歓迎だよ！

一先ず落ち着いて、席に座った私に女の子が聞いてくる。

「ご注文は」

「そのウサギさんで！」

「非売品です」

切り返しがあまりに早かった。でも、負けられないよ!!

「……せ、せめてモフモフさせて！」

勢いよく椅子から立ち上がってお願いすると。

「コーヒー1杯で1回です」

「じゃあ3杯でっ!!」

「……かしこまりました」

待つことおよそ数分。私の目の前には注文した3杯のコーヒーが置かれている。さて、せっかく頼んだんだもの、しっかり味も満喫しないとね！ シンプルなデザインのカップを口元へ。いい香りが鼻腔をくすぐって、ちよつと幸せ。

「この上品な香り！ これがブルーマウンテンかー」

「いいえコロンビアです」

……あれえ？ ま、まあ気を取り直して2杯目を頂こう……。

「この酸味……キリマンジャロだね」

「それがブルーマウンテンです」

そ、そんなあ……。こ、今度こそ。最後だし、きつと当たるよ！

「安心する味！ これインスタントの……」

「うちのオリジナルブレンドです」

……ご、ごめんなさい。まあ、^ノ鬼にも角にも。お、上手いこと
言っちゃったかも！ ティツピーと呼ばれていたウサギさんをモフ
モフする権利をもらったので、私は早速ウサギさんを抱っこしてみ
た。凄い……温かさともじやもじやの奥のふわふわ。モフモフのし
甲斐があるね！

「はあくもふもふ気持ちいい。いけないよだれが……」
「のおおのおお！」

「……のおおのおお？」

「……今このウサギ叫ばなかった？」
「気のせいです」

「おかしいなあ、でも今はモフモフすることが最優先！

「それにしてもこの感触癖になるなあ」

「ええい早く放せ小娘が！」

「……小娘？ 今絶対に小娘って言ったよ！」

「何かこの子にダンディな声で拒絶されたんけど」

「私の腹話術です」

「腹話術!？」

「そんなことより早くコーヒー全部飲んで下さい」

「そっかあ、腹話術か……。でも確かに喋ったような気がするんだ
けどなあ……。まあ、いいか。それより、道を聞いた方がいいよね。

「私ね、春からこの町の高校に通うの」

「はあ」

「でも下宿先を探したら迷子になっちゃって……。香風さんちってこ
の近くのはずなんだけど知ってる？」

「窓の外から視線を女の子へ戻す。すると、女の子は目をまんまるに
してこっちを見ていた。え？ 私、何か変なこと言ったかな？」

「……うちです」

「……え？」

「だからうちです。うちが香風です」

「えっ!？」

「ま、まさかそんなことがあるなんて！ たまたま立ち寄ったこのお

店がそうだったなんて!!

「凄い！ これは偶然を通り越して運命だよ！」

「……………（いきなり運命感じられた…）」

かくして私は無事に下宿先に辿り着くことが出来たのです！

ふう、良かったよお。

「私はチノです。こここのマスターの孫です」

「私はココアだよ。よろしくね、チノちゃん」

チノちゃんかあ、可愛い子だなあ。おっと大切なことを伝えてなかつたや。

「あと高校の方針でね、下宿させて頂く代わりに、その家でご奉仕しろって言われてるんだよ」

「うちで働くということですね」

喫茶店ってどんな仕事するんだろう？ やっぱりコーヒーを淹れたりするのかなあ。接客もいいよね。そんな感じでいろいろと考えていたら、

「といつても家事は私一人で何とかなってますし、お店も十分人手が足りてますので……何もしなくて結構です」

いきなりいらぬ子宣言されちゃった……。衝撃的!! 食い下がったり泣き付いたりした挙句、なんとか落ち着いて、こここのマスターに話をしなければならぬと思いついた。

「そうだ、こここのマスターさんはどこ？ ご挨拶しておきたいんだけど……」

「祖父は去年……」

少しトーンの下がったチノちゃんの声。あつ、もしかしてお爺さん亡くなって……。私つたらずごく空気を読めない発言を……。じゃあ、もしかして……

「そっか、今はチノちゃん一人で切り盛りしてるんだね……」

私より年下なのにしつかりして！

「いえ、父もいますし、バイトの方も2人いて……」

チノちゃんが何か言っているけど、きつと本当は寂しいんだ。だから！ 私はチノちゃんのお姉ちゃんにならなきゃ！ 思い切りチノ

ちゃんを抱き寄せる。少しコーヒーの香りが漂ってくる。

「私を姉だと思って何でも言って！」

「あ、あの……」

「だからお姉ちゃんって呼ん」

「じゃあココアさん。早速働いてください」

二品目 くオリ主登場のポターージュユ添えく

S i d e アンジュ

わたしの名前は今保田杏樹^{こんほだあんじゆ}。喫茶ラビットハウスでバイトを始め
て半年くらい経つ16歳。目の前には同期で同い年のリゼちゃん。
着替えの真つ最中かつ同性の前だからと、下着姿でそのしなやかな体
軀を晒している。リゼちゃんを一目見て思うのはセクシーだとい
うことだろう。私も胸の大きさならそこまで負けていないと思うの
が、身長が10センチも違うと色気がでないのだ。それに、リゼち
ゃんの髪の艶はすごい。どんなお手入れしているんだろう。大人びた
表情とツインテールの幼さがギャップで可愛い。

「アンジュ、どうした？ そんなじろじろと見て」

「たまにはいいかなって思ってたね」

「むう。私としてはアンジュの方が女の子らしくて羨ましいのだがな
……と、何かくる。隠れるぞ」

突如、何者かの気配を察知したらしいリゼちゃんにクローゼットに
連れ込まれる。流石に二人だと狭いが、リゼちゃんにぐっと抱き寄せ
られて、なんとか納まっている。この体勢…点身長差のせいでわたし
の頭がリゼちゃんの胸に押し付けられている！ 鼻血が出そうで心
配だ。

「いい匂いと柔らかさ……むふふ」

「ん！ くすぐったいから止せ。というか、息を殺している。……来
た」

「制服持つてきますね」

「わくわく、制服着れるんだ♪」

誰かの声があった気がするが、リゼちゃんの心音でイマイチ聞えな
い。

「ロッカーから感じる。まさかドロボー!!」

更衣室にいる誰かがロッカーの扉を思い切り開ける。リゼちゃん
一色の視界に少しだけ光が差し込む。

「下着姿のドロボーさん？」

「完全に気配を消したつもりなのに……。アンジュ、お前のせいかな？
そして、お前は誰だ？」

あ、ジャキって音が聞えた。アレを構えた音だね。と、思いつつ左腕でギュツと抱き寄せられたわたしの呼吸がそろそろ厳しい。

「えっと！ その、ココアです！ あと私、そういうの嫌いじゃないです！」

「どういふのだ？ って、アンジュ、しっかりしろ！」

「あ、リゼちゃん……さつきね、真っ白な百合のお花畑がね……」

「何かあったんですか？」

あ、チノちゃんだあ。

「チノちゃん！ 強盗が女の子を人質に！」

「ち、違う！ お前も何か言ってやってくれ！ だって、知らない気配がしたら隠れるのは普通だろ！」

「じゃあその銃は何？」

ん……ん。やっと頭がクリアになってきたよ。

「私は父が軍人で、小さい頃から護身術というか、いろいろ仕込まれているだけで、普通の女子高生だから安心しろ！」

【ろこどる】でもやるのかな？ 似合うかも。

「説得力ないよ!?!」

「取り敢えず、三人とも着替えてください。着たらホールに来てくださいいね」

そう言ってチノちゃんは更衣室を出て行ってしまった。まあ、お客さんがきたら開店休業状態だからね。仕方ないか。

「えっと、わたしは今保田杏樹っていうの。よろしくね」

「天々座理世、リゼで構わん」

「えっと、保登心愛です。ココアって呼んでくださいいね！」

自己紹介を簡単に済ませ、制服に袖を通す。ココアちゃんはピンクの制服を着るようだ。わたしの制服がライトブラウン、リゼちゃんは青紫だ。着替えたわたし達はチノちゃんに言われた通りすぐホールへ向かう。

「じゃあ早速、そこにある荷物をキッチンへ運んでください」

チノちゃんが指差した先にあるダンボール箱。

「ココアちゃん。そっち手伝うよ。リゼちゃんなら持つて行けるけど、普通は持ち上げるのが精一杯だから」

「私を何だと思ってる!?!」

「軍人の娘」

事実を告げるとリゼちゃんは黙って仕事へ戻ってしまった。むう、ダメだったようだ。

先に二つ持つて行ったりリゼちゃんがココアちゃんにメニューを覚えるように言っている。

「コーヒーの種類が多くて難しいねー」

「私は一日で暗記したぞ。訓練してるからな」

「すごい!」

「わたしも一週間くらいで覚えたかなあ。大丈夫だって」

「まあ、チノなんか香りだけでコーヒーの銘柄当てられるし」

「私より大人っぽい!!」

「ただ、ミルクと砂糖が必要なのよね?」

「あ、アンジュさん!!」

「あつ、なんか今日一番安心したー」

笑いに包まれる店内。まあ、お客さんがいないけど。ん、あまりに暇だからチノちゃんがアレを取り出したや。

「チノちゃん何してるの?」

「宿題です。空いた時間にこつそりやっています」

「ココアちゃんが問題をそつと覗くと、

「あ、その答えは128で、その隣は367だよ」

「すぐくすらすら解いていくなあ。」

「例えば、430円のブレンドコーヒーを29杯頼んだらいくらになる?」

リゼちゃんが問題を出した。えっと、430を30倍して430引けば――

「12470円だよ」

早い!! 凄いなあ。

「私も何か 特技があつたらな」

「……………(こいつ…バカそうに見えて意外な特技を…)」

「リゼちゃん、今とても失礼な感想を抱いたでしょ？ わたしも全面的に同意だけど」

そんな感じで、ラビットハウスに新しい女の子がやってきました。

三品目 くココアの初仕事 三人称仕立てく

カランカラ〜ン♪ お客さんの来店を知らせるベルが鳴る。

「いらっしやいませー♪」

「あら、新人さん？」

来店してきた女性がココアに話し掛ける。

「はい。今日から働かせて頂くココアっていいいます」

ココアが女性を席へ案内するのを見て、ココアの対人スキルに三人も感心していた。

「ふーん、ちゃんと接客できてるじゃないか」

「心配ないみたいですね」

「やったー！ 私ちゃんと注文取れたよー！」

「あー」

「えらいえらいです」

「二人とも棒読み……！」

アンジュが何とも言えない表情を浮かべている中、ココアは思い出したようにチノに尋ねた。

「このお店の名前、ラビットハウスでしょ？ ウサ耳つけないの？」

両手でウサ耳を表現しながら訊くココアにチノはジト目を向けながら答える。

「ウサ耳なんてつけたら違うお店になってしまいます」

「……（フルール・ド・ラパンはどうなるの？）」

誰にも聞けない疑問を心の奥に仕舞ったアンジュは、リゼの方を向いて大きく頷く。

「リゼちゃんとかウサ耳似合いそうだよね！」

「そんなもんつけるかバカ！」

そう言ってからリゼの頬が紅潮する。

「露出度高すぎだろー！」

「ウサ耳の話しかしてないのにー！」

「リゼちゃん……バニーガールを思い浮かべていたでしょ？」

アンジュに凶星を突かれて困惑顔のリゼにお構いなしで、ココアは

質問をさらにぶつける。

「じゃあなんでラビットハウスなのでありますか！ サー！」

着替える時にリゼが言った「上官に口を利くときは、言葉の最後にサーをつける」を忠実に守るココアに、リゼは普通に答える。

「そりやティツピーがこの店のマスコットだからだろう？」

「うーんでもティツピーうさぎっぽくないよ。もふもふだし」

チノの頭の上にいるティツピーを撫でながら、ココアは言う。それを聞いてモカが尋ねる。

「じゃあどんな店名がいいの？」

「ズバリもふもふ喫茶」

「そりや、まんますぎるだろう」

そう素早くつつこんだリゼだったが、チノの方は……

「もふもふ喫茶……」

「気に入った!」

珍しい程に目を輝かせるチノに、これまた珍しくアンジュがつっこんだ。そうして暫らく働いていると、お客さんの少ない時間帯となり少々暇が生まれてきた。その時、リゼがココアに声をかける。

「よしココア、ラテアートやってみるか？」

「らてあーと？」

頭に？を浮かべるココアにアンジュが補足で説明する。

「カフェラテにミルクの泡で絵を描くんだよ。この店ではサービスでやっているんだあ」

すると笑顔を弾けさせてココアは自慢げに言う。

「あつ絵なら任せて！ これでも金賞もらったことあるんだ」

そこにすかさずリゼが釘を刺す。

「町内会の小学生低学年の部とかいうのはナシな」

固まるココアにアンジュが、

「大丈夫だよ、すぐに上達するもん。ラテアートは」

フォローを入れて固まったココアを元に戻す。その間、リゼはお手本のラテアートを作り、チノは先ほど来店したお客さんの相手をしている。

「まあ手本としてはこんな感じに……」

リゼがココアに見せたラテアートは定番の一つ、リーフだ。最初にミルクを少し高い位置から流し、その後口に沿えてジグザグに流し込み、仕上げに切るように真っ直ぐ流し込む。最後の真っ直ぐに流し込むミルクの量にさえ気をつければ、比較的簡単にできる。

「わー！ すごく上手い！」

それを知らないココアは大はしやぎでリゼを褒める。褒めまくる。

「そ、そんなに上手いか？」

「すごいよー。リゼちゃんって絵上手いんだね！ ね、もう1個作って」

ココアがそうやってせがむと。

「あ、ココアちゃん。リゼちゃんをおだてると……」

アンジュがちよつとだけ困ったような表情を浮かべると、ココアもその理由をすぐに察した。

「そんなしよ、しょうがないな!! やり方もちゃんと覚えろよ!! 全くそんな上手くないって私なんか!」

そんなことを言いながら生まれたラテアート、それは……

「いや……上手いってレベルじゃないよ。ていうか、人間業じゃないよ……」

砲身から煙を吐き出している勇ましい戦車の姿。単純に戦車がすごい上に、その迷彩柄が何よりも細かい。そんなお手本と言い難いラテアートを見た後じゃあ可哀想だと、アンジュがリーフ以外のシンプルなラテアートを披露する

「アンジュちゃんすごいよー!」

「えへへえ。さあ、ココアちゃんもやってみよー」

アンジュに促され、ココアもラテアートに挑戦し始めた。

「よーし、私もやってみるよー!」

「がんばれー」

「気楽にだよお」

リゼとアンジュの声援を聞きながら少しずつミルクを垂らすココア。ピックも使いながら絵を描いている。一方のチノは先ほどのお

客さんの会計を済ませている。

「う……。なんか難しい……。イメージと違う」

完成はしたものの、満足のいく仕上がりではなかったらしい。

「どれ見せてみ……」

「お、ウサギさんだあ」

そこには、少し困った顔をしたようなウサギの絵が描かれていた。

「……（か、かわいいー）」

「笑われてる!？」

「……（ココアちゃんったら、気付かないかなあ。今のリゼちゃん、すごく嬉しそうな顔をしているのに）」

ちよつとした勘違いを起こしたココアは、そのままカップを下げる

チノにもラテアートを作るように言う。

「もー！ チノちゃんも描いてみて！」

「私ですか？」

そう言いつつ仕度をするチノを見ながら、リゼはモカに耳打ちする。

「あれ、確かチノの描くラテアートって……」

「えっと、一億円出すって言ったお爺さんがいたよね。追い払ったけど」

そんな会話を知らないココアは二人に笑顔を向ける。

「どんなのができるか楽しみだね」

「できました」

持つてこられて作品はなんとも前衛的な仕上がりで……。

「こ…これは……。チノちゃんも仲間ー！」

「仲間？」

見ようによつては下手とも言えるチノの絵にココアは仲間宣言を下し、それにチノは？を浮かべていた。

「ち、ちがうぞ。ココア、こういう絵は私たちのと一緒にしちや…」

説明をしようとしたリゼだが、困難だと気づき結局諦めた。

それからまた暫らく経ち、

「じゃあ今日はそろそろ閉めましょう」

喫茶ラビットハウスの閉店時間となった。

「おつかれさまー♪」

「おつかれー」

「おつかれえ」

四人は更衣室に移動し、着替え始める。そこでリゼがココアに尋ねる。

「ココアは今日からこの家で寝泊まりするんだな」

「うん。そうだよー。チノちゃん。今日の夕飯、一緒に作ろうね」

ブラウスの袖から腕を抜きながら、チノに言うココアだが、

「一人でも出来ますよ」

そつけない返事をされてしまった。一方のリゼはそんな二人を見て、

「……（え…なにそれ…楽しそう）」

「リゼちゃん。はやく着替えてよお。帰れないでしょ？」

羨ましそうに固まっていた。そんなリゼにアンジュが着替えるよう促す。着替えおわり、リゼとアンジュを見送ったココアとチノ。ラビットハウスの住居部分へ移動したココアの耳に、渋い男声が届く。

「…君がココア君か。よろしく」

現れたのは声の主、これまた渋い背の高い男性だ。

「こちら父です」

タカヒロと名乗ったチノ父にココアも挨拶する。

「お世話になります」

「…チノと仲良くしてやってくれ」

そう言いながら店舗部分へ移動するタカヒロにティップピーも跳び移る。ここはウサギの面目躍如である。そんな一人と一匹にココアは首を傾げる。

「この喫茶店は夜になるとバーになります。父はそのマスターです」

その理由をなんとなく察したチノが説明すると、ココアは納得したように言うのだった。

「へえ……そうなんだ。なんか、裏世界の情報提供してそうでかつこ
いいね」

「何の話です？」

当然、チノには何のことだかさっぱりだった。

四品目　くそれぞれの夜　ホワイトシチューを添えてく

「じゃ。おつかれえ」

「お疲れ様だ」

「ばいばーい」

「また明日、です」

モカとリゼがココアとチノに別れを告げて帰路につく。空は茜色に少しだけ濃紺が混じり、モカとリゼを夕日が照らす。

モカがリゼと腕を組もうとするのを、リゼが拒みながら締めようとするのを、さらにモカがいなす。そんな風に歩くこと十数分。鉄製の門が見えてくると、モカがスキップとともにリゼより数歩先を歩く。そして、

「お帰りなさいませ、お嬢様」

恭しく一礼するモカの仕草は、完全にメイドのそれだった。

「ああ、ただいま。モカ」

喫茶ラビットハウスにアルバイトとして働く亦里萌佳の本業は、天々座家に仕える、リゼ専属のメイドさんなのだ！

一方ラビットハウスの居住スペースでは、ココアとチノが夕飯の仕度に取り掛かっていた。

「夕飯はシチューでいいですか？」

髪をポニーテールに結び上げ、エプロンを身に着けたチノがココアに問いかける。ココアは頷きながら、

「野菜を切るのは任せてー！」

と言つて、冷蔵庫から野菜を取り出す。二人がキッチンに並びながら調理を進めると、

「なんかこうやってると姉妹みたいだね♪」

ココアのテンションが少しずつ上がっていく。花が咲くような笑みをチノに向けるが、

「はあ……」

反応は薄い。少しだけ思案顔を浮かべたチノがぼつりと、

「(姉妹……か) ココアお姉ちゃん……ですね」

そう呟いた。この一言がココアのハートを射抜き、

「もう一回言って」

右手にピーラー、左手に人参を握ったまま頬を染めて待ち続けるのだった。

「……………」

「お願いもう一回」

だがしかし、チノがお姉ちゃんと呼ぶことはなかった。

夕食を終え少し時間が経ち、チノはお風呂に入っていた。そこにココアが突入する。

「チノちゃん、お風呂入る！ ココア風呂だよー！」

「ココア風呂!?!」

疑問符を浮かべるチノに入浴剤の小袋を見せる。粉末をサラサラといれると、ふわりと甘い香りが広がる。チノの隣に座ってお湯に浸かるココア。

「ね、今日は一緒に部屋で寝てもいい？」

「一緒に……ですか？」

「うん♪ 一杯お話したいことあるし」

にこりと微笑むココアにたじろぐチノ。

「ふ、不束者ですがお手柔らかに……」

「へ?。」

ぶくぶくとお湯に沈みながらチノが言ったセリフをココアが疑問符を浮かべる番だった。

しばらく浸かって洗いつこを済ませた二人。パジャマに着替えてココアはチノの髪を乾かす。チノの父はドライヤーを使わないため、ドライヤーはチノの部屋に置かれている。

ココアはドライヤーの風をあてながら、指でチノの長い髪を梳く。

ふと、ココアがチノに問いかける。

「そういえば、ティツピーは？」

「父と一緒にです」

目を細めながら、ココアに髪を好きにさせるチノ。もう十分に、懐いている様子がなんとも微笑ましい。

「そっかー。ぎゅーつとして寝たかったのになー」

「ティツピーは抱き枕じゃないですよ」

「じゃあチノちゃんぎゅーつとして寝ようかな」

にこりと微笑むココアを鏡越しに見て恥ずかしくなったチノは、膝に乗せていたうさぎのぬいぐるみをココアに投げつけるのでした。

所変わって天々座邸。セミダブルとも言えそうなくらい広いベッドにうつ伏せで寝るリゼ。形と大きさに恵まれた胸が、17とは思えないくらいに艶かしい。

……ただ、していることはあまりに子供だった。

「聞いてくれよワイルドギース。今日、新入りが入ってきてなー、こいつがなかなか変わったやつでさ」

リゼの髪色に近い色をしたうさぎのぬいぐるみ、ワイルドギース。

「練習用ラテアートが余りまくって大変だったよー。当分カフェラテは飲みたくない……」

そんな彼(?)に話しかけるリゼ。……一見クールな彼女の、意外な一面である。

「ってなにやってんだ私はー！ 寂しくない。寂しくないぞー！」

ただ、話しかけてからその恥ずかしさに悶えるのが一連の流れなのだ。ベッドの上で少しじたばたしていると、ケータイが光っていることに気付いたようだ。

「ん、メール？ あれ、ココアからだ」

営業が終わって着替える前にお互いの連絡先を交換したばかりなのだ。ココアからの初めてのメール。そこには、

「……あいつ、こんなの作っていたのか。明日からもがんばろう、か」
ラビットハウスの四人をラテアートで描いたものが、添付されてい

た。その写真をそつと待ちうけにしたりゼの笑顔を、こっそりと見つめるモカ。

彼女たちの夜はまだ長い。

五品目 く迷宮に注ぐココアく

Side ココア

「普通に？ 優等生っぽく？ それともフリヨーっぽく？」

「可愛い制服だしどう着ようかなあ。せっかくの入学式だし、なんかこう……いい感じに……。」

「ココアさん、何してるんですか？ そろそろ行きますよ」

「あ、チノちゃん！」

部屋に入ってきたチノちゃんは可愛い青の制服を着ていた。

「チノちゃんの学校、帽子もあるんだね。可愛い！」

「もしやこの帽子の下にはティツピーが……!? いざ、ご開帳!!」

「何を期待したんです？」

「いない!! ……まさかないなんて思わなかったよ。うん。そんなチノちゃんと一緒に一階へ降りる。まだまだ眠そうなチノちゃんが頭の上をわさわさする。」

「チノちゃんどうしたの？ ティツピーいないよ？」

「ハツとしたチノちゃん。すぐに恥ずかしいのか顔が紅くなる。なんだか可愛いなあ。」

「ティツピーの位置を直すの、クセになっちゃってるんだね」

「タカヒロさんに見送られて学校へ行く。チノちゃんも同じ方向らしくて、一緒に行けると喜んでいたら……。」

「では、私こっちはです」

「早っ!?!」

「すぐにお別れになってしまった……。一人とぼとぼと街を歩いていると、遠くに見覚えのある二人がいた。」

「おい、リゼちゃん、アンジュちゃん！」

「ココアちゃん！」

「目立つからやめろ！」

「アンジュちゃんは反応してくれたけどリゼちゃんからは怒られちゃったや。二人は私とは違うブレザータイプの制服を着ていて、な

んだかお嬢様って感じがしてかつこよかった。ほら、タイが曲がって
いますよ、みたいな感じの。

「制服交換してみない？」

「いいね、セーラー服着るの二年ぶりかも！」

「お前ら……自分の学校行けよ」

ノリノリのアンジュちゃんだがリゼちゃんに止められてはしかた
ない。

「またお店でねー」

「迷子になるなよ」

二人にそう言われて別れ、学校へ向かっていると、
「あれ？ また会ったね」

アーチが特徴的な交差点で二人を見付けてお別れすると、また五分
後くらいに今度は階段ばったり会った。

「すごい、また会った」

「ココアちゃん、学校の場所分かる？ 迷子になってない？」

「大丈夫だよー」

心配そうなアンジュちゃんに見送られて、学校へ向かう。

「あれれー、まただー」

「ココアちゃん、ほんとにほんとに大丈夫？」

「わ、わたしは異次元空間に迷い込んだいのか……!?!」

すつごく心配そうなアンジュちゃんと、なんだか頭の痛そうなりゼ
ちゃんに見送られてまた歩き出す。ちよつと疲れてきちゃったかも。
学校って遠いんだなあ。

「うう、ちよつと歩き疲れちゃったなあ……」

体力はけつこう自信あるんだけどね。立ち止まって呼吸を整えて
いると、ふつと視界の片隅にウサギの姿が見えた。

「これが噂に聞く野良ウサギ……」

真つ白なウサギと目が合う。ダメだよ、ここでもふもふしてたら学
校に送れちゃう！ でも、でもでも……。

「はあくもふもふきもちい〜」

抱きしめたウサギの暖かさに気持ちちがゆるむ。身体もゆるんだの

かウサギが脱兎の如く逃げ出した！ もうちよつと触りたい私は慌
てて追いかけた。そしたら、ちよつと広い公園に着いた。
「あ、あれは……」